

若手研究者海外派遣プログラム 派遣終了報告書

1 派遣者	
所属機関	国際日本文化研究センター
氏名	北浦 寛之

2 派遣計画 概要	
派遣国	イギリス
派遣期間	平成 29 年 8 月 22 日 ～ 平成 29 年 9 月 23 日
派遣先機関名	イースト・アングリア大学
(英語)	University of East Anglia
派遣先機関住所	ノリッチリサーチパーク、ノリッチ、ノーフォーク
(英語)	Norwich Research Park, Norwich, Norfolk, NR4 7TJ, UK.
受入教員名	イヴォンヌ・タスカー
(英語)	Yvonne Tasker
研究課題名	イギリスにおける日本映画・アニメの流通に関する調査
(英語)	An investigation into the circulation of Japanese film and anime in the UK

3 派遣による研究実績

(1) 調査研究実績 (研究計画に沿い、実施したことを記載してください。)

本研究課題「イギリスにおける日本映画・アニメの流通に関する調査」は、基幹研究プロジェクト「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」にも結びつく、イギリスとの関係から日本の映画・アニメといった大衆文化の動向を歴史的に探るものとして実施した。

到着後すぐの8月24日にイースト・アングリア大学(UEA)で開催された、ワークショップ“International Workshop on Reflective Transitions of Politics in Japanese Art”に出席した。アートをテーマにした催しの中でも、海外の研究者によってアニメの報告が目立ち、1970年代の人気テレビ・アニメ『UFOロボ グレンダイザー』の日本とイタリアでの受容比較、2009年公開のヒット映画『サマーウォーズ』に潜むナショナリズムの問題など、について耳を傾けた。そうした研究者と意見交換をしながら、今後、アニメや映画など日本のポピュラー・カルチャーに関する研究を共同でできないか、打ち合わせをおこなった。

こうして、アニメに対する海外の研究者の関心の強さを感じる中で、UEAでアニメの受容に関する文献を調査していった。イギリスでは、1980年代後半に『超神伝説うろつき童子』(1987年)『アキラ』(1988年)『鉄男』(1989年)などのアニメ・映画などにより、ベースとなる重要なファン層が芽生えた。1990年代には、アメリカやフランスなど他の西欧諸国と同様に、熱狂的なファンが増え、92年にはロンドンのInstitute of Contemporary Arts(ICA)で最初の大きな日本アニメのフェスティバルが開催されるといった具合に、一連の歴史的な背景を理解していった。

また、デイリー・テレグラフやタイムズ、インデペンデント、ガーディアンなどの新聞で、日本のポピュラー・カルチャーに関する話題がどのようにこれまで報道されてきたのかを歴史的に調査していった。

セインズベリー日本藝術研究所のリサ・セインズベリー図書館では、イギリスで唯一、日本のポピュラー・カルチャーを専門に扱った月刊誌『NEO ネオ』の調査をおこなった。やはり、アニメやマンガの話題が中心だった。『君の名は。』(2016年)や『この世界の片隅に』(2016年)など日本で大ヒットしたり、話題になったアニメについては特集記事が組まれていた。特に『君の名は。』は、『NEO』による2016年のベスト・アニメに選出されるなど、評価が高く、数回にわたって記事が掲載されていた。

実写映画についても、たびたび紹介されていた。ただ、多くが旧作品についてであった。大ヒットした『シン・ゴジラ』(2016年)関連の記事でも、内容は「シン」ではない「旧」の方に、昔の特撮技術の解説を交えて関心が向けられていた。いずれも過去の日本映画から日本的な要素を抽出して紹介する意識が感じられた。

他にも、コスプレなど日本をイメージさせるものの特集や、日本で流行している商品に、日本語に関する基礎的単語の紹介も掲載され、日本をどのように見ているのかを『NEO』を通して読み解くことができた。

(2) 基幹研究プロジェクトにおいてこの派遣が果たした役割

イギリスでの現代の日本の大衆文化を象徴するアニメの流通や受容について、現地の研究者と交流をしつつ、集中的に調査することができた。日本映画については、過去の作品を対象としながら調査を進めていった。こうした成果は、日文研の基幹研究プロジェクト「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」において、もっぱらイギリスとの関係で日本の大衆文化から日本像を見つめ直すことにつながるものである。

まずは基幹研究プロジェクトの特設ホームページで、今回の派遣でおこなった調査の内容を整理して掲載し、イギリスにおける日本の映画・アニメの流通の実態を広く伝えていきたい。

(3) 所属機関における学術分野に貢献する事項

日文研では大衆文化関連の共同研究会に参加しているが、そうした際に、国際的視野に立った、映画・アニメについての議論を展開し、研究会の進展につなげることを目指す。また今回の派遣で、多くのイギリスの研究者とも十分に交流できたことで、今後共同で研究プロジェクトやワークショップを開催するなどの企画を立て、日文研の国際的な活動の一助になることも期待できる。

(4) 研究成果（著書、論文及び報告書名・講演題目）

『京都新聞』2017年9月21日夕刊の「現代のことば」欄に、「海外でのアニメ人気」というタイトルで、今回の派遣の内容を一部紹介。

2017年12月刊行予定のNICHIBUNKEN NEWSLETTER No.96に「若手研究者海外派遣プログラムによるイギリスでの研究」というタイトルで、派遣の報告をおこなった。

(5) 見込まれる研究成果（著書、論文及び報告書名・講演題目）

事前の研究計画でも述べたように、岩本憲児編『日本映画の海外進出』（森話社、2015年）などでも、イギリスでの日本の映画・アニメの話題は無視されてきた。イギリスでの日本の映画・アニメの影響力を論文等で明らかにすることで、今後の文化的・経済的交流における重要な指標となり得る。

また、私は過去に、「海外展開 — 『るろうに剣心』の映画化とフィリピンでの人気」、『マンガ・アニメで論文・レポートを書く — 「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房、2017年4月）で、フィリピンにおける日本のアニメの歴史的な受容の展開をたどったことがある。今回は、イギリスにおいて同様の調査をおこなってきたわけで、イギリス、フィリピン、他の地域も今後調査を進めることで、世界各国で日本のアニメがどのように広がっていったのか、まさに国際的な受容の様態を単著として明らかにすることも目指している。

(注意事項)

- ・本報告書は、帰国後1ヵ月以内に提出して下さい。
- ・この報告書を、本機構により刊行、Web掲載、広報冊子等として公表することがあります。この場合、内容に影響しない範囲で修正を行うことがあります。